若疑シク覚候ハバ
我等ノ所業終候処ヲ
爾等眼ヲ開テ看ヨ

11月5日（1973年）
毎月5日、20日発行
第60号
購読料金 1部30円
定期購読 半年分 800円 一年分1500円（〒代共）

# 叛 旗
共産主義者同盟

発行人 川崎文人
編集人 他代真理
発行所 共産主義者同盟「叛旗」編集委員会
（〒160）東京都新宿区百人町2−16−18 小林ビル105号室 叢構社気付
TEL 03−362−0149
振替 東京 162868

11月下旬 革マル早稲田祭粉砕
早稲田解放闘争
12月上旬 インフレ粉砕集会（予定）

# 革マルとの対峙—拮抗戦を貫徹し、早大闘争の爆発を

## 「過渡期」情況を政治—社会構造の歴史的駆動として把捉せよ

全国の同志諸君！「叛旗」購読者諸君！東西での10・21政治闘争、首都圏での10・28朝霞現地闘争、関西での10・19〜21伊方現地闘争、10・24京大伊方原発総決起集会は、将に秋期闘争の政治的頂上攻防にふさわしく果敢に闘い抜かれた。かかる政治攻防は、一方で21前日の革マル派の中核派への夜襲に象徴される「党派闘争の為の党派闘争」の全面化と政治焦点の拡散、他方での中東戦争拡大とそれに伴なう国際エネルギー危機の、あっけないまでのキッシンジャーのブレジネフ訪問による政治的終結の渦中で展開された。前者は8年目という外的時間の経緯に力点をおいた10・21闘争のセレモニー化、屋上屋を重ねるかの憲法論争への戦争、軍隊、基地集約方向とその低迷化、全くもって支配層の危機を目に見える同一土俵で追いつめんとする新、旧左翼の情勢対応のスタイルの限定の更なる発現であり、つまりは〈政治〉の不在を示しているのだ。また後者は、国家間戦争が明確にセンメツ戦としての総力投入戦から、形態としての局地戦、その根拠としての国家水準をめぐる攻防に転移していることを直視せねばならない。政治闘争の内化を、国家の歴史性—構造性双方から獲得してゆくことこそ、現下の国内、国際階級闘争の統合視座であり、我々はかかるものとして10・21を伊方、朝霞へ連関させて主張し実践し抜いたのである。国民総合力の拡散と階級成熟の現局面を冷徹に見据え、政治闘争の内化—社会闘争の拡充の指標のもと、更に大胆に11月〜12月早大—投機闘争へ進撃せよ！

### 秋期政治過程と情勢の現局面

8年目を迎えた10・21闘争はわれわれを含め、全国七十五ヶ所で闘われた。68年10・21闘争を頂点としたいわゆる「国際反戦デー」10・21闘争は、69年から70年、ベトナム和平以降と二つの屈折点をみることができるだろう。

安保、沖縄、ベトナムと60年代日本階級闘争の高揚を克ち取った規定因はそれらの全世界的規模での最尖端の歴史水準として外からもち込まれたものとしてあったことをわれわれは幾度かこの間指摘してきた。安保、沖縄、ベトナムの政治課題からの後退は相即的に政治革命をなさんとする政治集団—革命党派の過渡的性格への検討を促がしてきた（そのことに無自覚な部分をも含んで）。

安保、沖縄、ベトナムを日本における政治革命の問題として、即ち、世界革命の問題としてわれわれはどのように押えてきたのかという内省的契機こそより実にわがものとしなければならない。

日本における政治革命の問題はすぐれて日本の政治構造の二重性社会構造の二重性の解明、いいかえれば政治闘争—社会闘争といってきた内容の確定をするどく突きつけている。このことに対するアプローチは二項以下で言及するので、ここでは最近の情勢の局面を10・21〜10・28への主体的立場へどのように構造化されてきたのかを見ておきたい。

事実関係としての世界情勢は、新たな政治、軍事、経済再編として9月25日からのSALT第二次交渉、9月24日からの第二十八回IMFナイロビ総会として、さらに9月18日からの第二十八回国連総会に象徴される。そしてそれらの経過において世界の支配階級の止揚なき世界再編の泥沼的延命策のジグザグとして二重に象徴的である。

全世界的規模での政治、軍事、経済過程での情勢変化に対する世界の支配階級—支配層の回答不能はたとえば、チリ・アジェンテ政権崩壊に対するアメリカの新政権承認と北朝鮮の国交断絶、アルゼンチンでの軍事政権からペロン政権の再登場それらに伴なうテロ内部政争等は、世界的インフレによる生活破局の民衆共同性水準がイデオロギーの無効性と生活救済のカリスマ希求の擬宗教性を発現していることにおいてあることを、包括的に止揚しえないこととして象徴的である。

また、タイの学生運動の爆発—新高揚が当初国王を背景とし、新憲法公布をめぐってのタノム政権の非常大権の発動による学生、知識人を抑制せざるをえないこと金大中事件からKCIA解体、反朴反政府闘争へと再爆した韓国学生運動が昨年の非常戒厳令弾圧という世界の最大級の弾圧と対時しつつも、その水準がやはり〝言論の自由〟〝政治活動の自由〟擁護—奪還という李承晩政権時代の水準を根底から止揚しえていない民衆共同性においてあること等々をみていくとき、それらの闘いが歴史水準としては擬宗教国家から自由国家への脱皮の枠内にあることとして押えることができるのである。そして自由国家水準の最尖端にあるアメリカはキッシンジャーをして国連演説で〝平和共存から世界共同体へ〟という空論を吐かざるをえないとき、自らの国家が現在的な世界秩序としての水準を歴史的、構造的に一切止揚することができない手直しでしかないことをみてとれる。

さらに中国十全大会から中国IMF加入問題への打診はより国連レベルでの上げ底化された米中対立止揚へのスライドと同じ国連レベルでの南北対立激化の構図も見落してはならない。

軍事的レベルに問題をしぼっていくならば、第二次SALT交渉の内実がABM制限協定と攻撃用戦略兵器制限の暫定協定の調印後の延長線上にあることと、より新たな問題としての東西ヨーロッパにわたるMBFR（相互均衡兵力削減）の登場としてみてとれる。とりわけMBFRはSALTにおける米ソ対立関係がソ連—東欧、アメリカ—西欧、東西ヨーロッパ相互間、中—ソ間の政治関係へのはね返りは必至であり、それらに十全の回答がなしえないのは当然のことである。このことは一方アメリカのキッシンジャー構想、ソ連のヨーロッパ、アジア集団安保構想、ベトナム和平協定、ラオス和平協定等の側面と相即しておりこでの民衆共同性の国家化—歴史化による固定化が過渡期世界秩序構造に包摂され、キッシンジャー構想が、その構造性水準を過渡的世界秩序構造の止揚としての歴史性へ転化しえないこととしてみておけばよいのである。

経済的領域をみていくならば、IMFナイロビ総会における国際通貨改革の問題として象徴される今回の内実は従来の抜本的な手直しから本格的なブレトンウッズ体制に代わる新たな国際通貨体制形成へ74年7月31日までを目安としたIMF協定改定案模索の確認としてあった。

71年ニクソン二大声明以降の国際通貨体制の解体は当然にも世界的な規模でのインフレ進行に抗うべくもなく、開発援助とSDR配分とはリンクするべきではない、否するべきだという米仏の対立を [illegible]

[illegible] 安定策の一環として操作されていく側面においては現下の世界的インフレ化においてはますます食糧問題は前面化せざるをえないだろう。またエネルギー問題は中心的な石油エネルギーの需給をめぐってのOPEC（石油輸出国機構）の5％減産と値上げによる供給側の不安定要因の激化をみせ、現在的な第四次中東戦争も裏面での米ソのエネルギー問題への画策を当然にもはらんでいる。また、石油から原子力等の代替エネルギー利用も環境問題、技術開発問題等においてデッドロックに突き当たらざるをえない局面にある。四国、関西の同志による伊方原発阻止闘争もそうした背景を持っていることも明らかにしてきたことである。

我々はこうした政治、軍事、経済過程での事実関係の推移が示している内容として理論的にはラブロックの検討—世界情勢動向の構 [illegible]

### 政治闘争の内化と実践過程の現実性

秋期政治攻防の頂上をなす10・[illegible] 闘うのだといったとき、外在的な [illegible] 標の検討としてある。

そしてまさしく10・5横須賀、10・21闘争、10・28朝霞闘争は「政治闘争の内化」として闘われてきたのである。

ここでは第一項でみてきた政治 [illegible] 間的、戦略的位相においてあることにおいて二重に不可視のアポリアとしてそのことはあるのだ。

われわれはここで右の問題を現下の基地、自衛隊闘争の実践局面にしぼってみていこうと思う。

[illegible]

## 10・28早朝、最先端で 朝霞現地闘争打ち抜く 更に持続的展開へ

10・28朝霞現地自衛隊パレード粉砕闘争は、28日早朝、わが反帝戦線精鋭部隊70余名の密集した結集をもって、一切の諸党派の最先頭で闘い抜かれた。

反帝戦線部隊は忽然として朝霞駅頭に登場し、社共、べ平連、革マル等の集会を尻目にすぐさま基地正面ゲートに向けて進撃した。降りしきる雨の中、反帝戦線部隊は、立ちはだかる機動隊の壁に断固たる攻撃を敢行し、正面ゲートでの対峙戦を経て、和光市までの戦闘的デモンストレーションを貫徹した。

自衛隊パレードは、従来の神宮外苑からのパレードを美濃部の反対にあい、都下へ変更せざるをえないという事態のうちで行なわれ田中の日米安保を堅持し、防衛力を強化するという方向はいささかも変わりはない、という空疎なアジ演説のうちにも現下の内政不在外政膨化下の政府—ブルジョアジーの混乱が泥沼的に進行しているさまを、この日のわれわれの闘争はますます明らかにした。

われわれは「われわれのみが唯一……」という類いの諸派と遠く隔たり、現下の政治過程の変容構造を見据え、基地・自衛隊闘争の更なる深化へ、立川・横田、相模原、朝霞闘争の総括を国家—民衆像の鮮明化へ断固として進撃しよう。

## 10月闘争の成果を踏え 11月首都へ総進撃せよ
### 関西反帝戦線連合

全国の同志諸君！「叛旗」購読者諸君！叛旗58号で明らかにしたように我が関西反帝戦線連合は秋期政治攻防の前段階10月闘争を勝利的に展開した。10・21総決起集会は関西の諸党派・諸戦線が何の実践的環も明示することなく東京集会へ糾合する中で、唯一関西の地において、政治闘争の現在的位 [illegible] 台前に大衆的登場をなした。また秋期闘争の環として設定した伊方闘争においては、10・19〜21里道導通連続闘争を現地住民組織と共に最先頭で唯一政治部隊として闘い抜き、10・27〜29反公害学生交流松山集会伊方現地闘争にも強固な部隊として愛媛地区反帝戦線の同志と共に闘い抜いたのである。（詳細次号）

情勢推移の急激さと支配階級からの攻勢激化の中で、それら一切て過ぎ去っていくといった情況の特質を、階級闘争の今日的性格として照射、確定せねばならない。

関西の地に根深く在る独得の政治的風土、土壌を、その捨てるべきものと取るべきものを明らかにし総体的止揚の方向へ歩を進めんが為に、一方での政治的構想と他方での社会闘争の拡充下で蓄積される経験化力を革命への必然的回路へと紡ぎきる中から今秋期政治攻防を更に大胆に展開せしめねばならない。反軍・反基地・反自衛隊闘争、伊方闘争の持続的戦闘体制構築、「関西的「政治」の負性との対峙・抵抗・止揚の持続的営為から早大11・8、投機インフレ闘争へ前進せん！

### 10月攻勢を勝利的に貫徹す

10・21早大、投機インフレ闘争 [illegible] 報告に立ち、続いて各戦線から戦線報告がなされた。最初の報告に立った竜大班の同志からは、学費闘争の経緯と我々のかかえた困難な課題—全共闘運動から何を継承して次なるものを産むのか—について現在の2・4弾圧粉砕裁判闘争にひきつけての報告がなされ、住火派との党派闘争を貫徹し、竜大大衆運動の新たな展開に向けての決意が表明された。続く労働戦線からの報告は、合同労組としての闘いの中から大和中央病院等の諸争議を介して顕在化した日本型組合運動の負性—総評執行部（協会派）に代表される闘いの圧殺と居直り、戦闘的労働者の「排除」策動—そしてそれと如何に闘い労働者民衆の内発性・自発性を開削していくかについての指標が具体的な闘争報告の中から明らかにされた。森永告発の会有志からの発言は、森永ヒ素ミルク被害の実態と闘いの経緯、一方での裁判闘争の現局面及び不売買運動の展開が報告され、被害者、「守る会」、「告発する会」の統一的な課題と闘いの連帯性があるとの問題提起がなされ「森永打倒・日帝打倒、日帝のアジア侵略と闘う」から「K−K連合粉砕」を主張する政治主義への批判が鋭く展開された。集会はいよいよ佳境に入り、本集会に東京から駆けつけた反帝戦線早大班の [illegible]

## 10/19〜21、10/27・28〜29 伊方原発粉砕闘争を貫徹す
### 愛媛地区反帝戦線

[illegible]

現地住民と連帯して闘う反帝戦線

## 11・8の経験をもとに 奴隷の杜へ攻め登れ
### 「革マル」早稲田祭粉砕！
（11・8早大報告次号）

[illegible] 造的整理の方法的反省として問題にしてきたのである。そこでの問題は空間的対象世界の歴史的時間による把握の外在性をとり込む主体的立場の依拠する基盤の解体としてあるということである。歴史的時間と個体的—生理的時間の疎外関係を自然概念としてではなく歴史概念の位置から問題にするとき現存の世界秩序に異和として登上しえた共同性に秩序転覆の幻想を持ちえたことの歴史水準自体の秩序化—固定化の背理構造をみていかねばならぬということである。それはわれわれが国家—世界を空間的な突破の問題でしか扱えない部分と異なり歴史累積の幻想性の問題として扱うといったとき、国家に累積された幻想性水準と照応して自らの個や対として発現する民衆共同性水準としての現存性として自らを構造化し、政治集団を相対化しえているかということである。

現下の政治闘争の困難性はそこから開削していかなければ一切が進展しないという歴史地平である。

[illegible] 者の位相においては一切構造的に扱かえない、なかったということである。

前者の側へ依拠する立場は自衛隊—軍隊中軸論、叛軍闘争論として対国家闘争へスライドさせてきたのである。彼らは自らの革命の磁場を空間的共時性としての第三潮流の主体に重ね合せるのである世界のどこかで抑圧されたもの、差別されたものがいる限り、それは自らの責任であり、それらを許容している世界を今だ存続させている党の責任として自覚し、（？）献身的に闘うことが出来るのである。彼らには抑圧や差別の問題は [illegible] りに気づかぬように。だから彼らはいつでも自らの立場を空間的な被抑圧者、被差別者との連帯を呼号するかあるいはそうした部分との連帯を十分に克ち取れていない自分を嘆き主体の認識の上昇の問題へつなげばどこまでも〈革命的〉な主体であり、党の充足なのである。

こうした部分と深く訣別し、問題の核心を後者の側から捉えていこうとするわれわれの現実のアポリアはそうしたアポリア自体に対する無自覚な部分の包囲という事態において二重に困難なのである。

そこからわれわれは何度でも「 [illegible]

# 早大闘争と学生運動の焦眉の課題（上）

今日の日本学生運動は深刻な後退戦を体験している。戦後の階級闘争の中心的な一翼を時代的な突端性として背負ってきた日本学生運動の深刻な後退局面は情況的にか、主体的にか極めて象徴的な事態を呈していると考えることが出来る。確かに現実は、歴史の内在的位相を逆接的なリアリズムとして包括性を呈する皮肉な存在といえるものだ。今日、深刻な後退局面を体験している学生運動の揚裡で徘徊している「危機論」者や、先験主義者は、前者が、情勢の側から押し出されてくる深刻な階級闘争の後退局面を「情勢の高揚」への過渡として情況を翻訳するのに余念がないし、後者が、主体の側に刻印されている深刻な存在的動揺局面を、我が国〈プロレタリア政治と組織〉の伝統の画み（？）に立って、その先験性と、ステロタイプ化された普遍妥当性を説いて廻るという意味で否定的現実の戯画として自戒の素材を構成しているにすぎない。今日、我々がもっとも中心的な闘いとして措定している早大闘争の内在性や、その固有の運動が、歴史的現実の側から押し出されてくる深刻な後退・持久構造の仮構であるのか、または、歴史的駆動の過渡的情況であるのか断定は出来ないにしても、そのいずれかであるかは疑いえないと考えるのである。現下の早大闘争が必然的な現実であるとするならば、我々はここから歴史を、情況を学ばねばならず、「時」をつかまねばならない。早大闘争が、否定的現実の逆接的な仮構であるとすれば、我々はかかる現実との対時―拮抗の中から深刻な後退局面を突破すべき抵抗運動の布陣の創出と「時」をつかまねばならない。我々の政治経験と思想容量の時代的・歴史的負荷を突破するものとして、いづれにしても早大闘争を日本学生運動の橋頭堡として構築せねばならないのだ。

## はじめに

現下の早大闘争が如何なる発展過程を経て、どの様な態様を呈するのかについて予言をすることに熱中することは必要ではない。ただ確信的に述べるとするならば、個々の事象や、実践的指標の単純総和や、発展段階的（時系列での意味付与や、平面ガエル的相関性の説明が、早大闘争の全体像を決して明らかにすることがないという点である。

確かに、我々は個々の事象や、実践過程の裡に、日本学生運動が到達した政治経験と思想容量を最高のレベルで生かさんとしてきた。しかし、現時点で我々が注視し、解答を要求されているとすれば、それは、個々的な事象や実践過程に向けられた我々の政治経験と思想容量が、運動のもつ歴史的構造性（全体像と歴史の駆動化）への包括力―存在としての力（〈理念形態〉、主体〉の構造的創出）〈至る過程で如何なる屈折を情況―主体の側から余儀なくされており、また、具体的契機自体を深刻な後体局面下の日本学生運動の駆動性に向けた指標として思想―経験の容量に確実に蓄積することが出来るのか、という点にあると考えるのである。

我々は、何度も、現下の早大闘争をつき動かしている根源的な力を検討するにあたって、この闘いが旧来の左翼の政治経験、思想の容量とは異質な理念性、現実性の把捉を要求していることに自覚的でなければならないと主張してきた。しかも、そこでの歴史的な運動の駆動性を見極めんとするとき日本における伝統的な〈プロレタリア政治と組織〉構造―〈党―大衆〉構造からする現実把握においても、それらを相対化する意志的な自立的大衆運動の経験の蓄積の側からする現実展開に於いても、今日の早大闘争をめぐる存在的エナジーの歴史的構造が可視的な高揚として、これらを超えているというダイナミズムの相関性としてではなく、文字通り大衆存在の歴史的現実力と、そこでの主体的な運動構造（持久戦・抵抗運動）が不可避にかかる〈プロレタリア政治と組織〉論、空間的諸契機を介在させた経験の蓄積を相対化し、思想と行動に於ける内在的構造（往還―運動の弁証法）を空転させている情況としてあるということについてもである。

勿論、これらの情況を必然化せしめている現実的な力は、現下の「国家―民衆」関係のもつ特質に依って生まれるものである。我々は、この点を徹底的に解明してゆかねばならない。従来の思想と行動に於ける蓄積とここでの否定的現実を超える現実的な回路は、学生存在の歴史的現実を、現下の政治―社会構造の転貫のもつ位相に位置づけ、「国家―民衆」関係―構造の裡に新しい運動・行動の〈理念〉・〈範型〉の創出に勝利することである。

ある旧知の〈定型〉が、新たなる〈定型〉を歴史的現実に押し出す内在的な回路は、そこに、行動・運動にかける〈理念〉、〈範型〉を思想のもつ現実性と、実践の苦闘の中から導びいてゆく様にして現われるものである。

今日、我々に要請されている歴史的な態様は、政治経験や、空間的諸契機の構造化を時間的抽象の側へ、思想のもつ容量を現実駆動性の側へと意志的に実践することである。情勢と主体の絡みを問題にする場合、ここでの深刻な後退局面を突破する我々の方法的確認は、ある意味では逆接的なリアリズムを生きることと同義である。我々は、早大闘争の現実に肉迫するなかから、日本学生運動の深刻な後退局面の内実を析出すると共に、その突破に向けた回路の解明に集中しなければならない。

## 早大闘争の根源性とその歴史的位相

早大闘争の現実展開がもっとも集中的に体現する内容は、この一年に渡る諸実践が、そこでの行動者、行動者集団、あるいは、その相互性において、如何に、歴史的な経験や、体験の累積過程で、自らの関係や共同性の契機・結合の構造転換―内在的転移をもたらしてきているのかであると考える。何度か展開されてきたが、早大闘争の構造―内在的位相を検討してみよう。

早大闘争は革マルによる「川口君虐殺」を具体的、現実的、過程的契機として持続的に展開されているが、ここでの低抗運動の〈理念〉、〈範型〉を規定している内在的契機は次の点である。

①川口君虐殺を直接的に遂行した革マルの〈プロレタリア政治と組織〉構造―〈ドレイの体系〉を拒絶し、その現実基盤を粉砕―解体してゆくことである。

②「川口君虐殺」を象徴とする無数の情況的な「死」を生んできた「早大の日常」―就中、早大管理支配体制―学生支配の歴史的な貫徹のもつ秩序構造を把捉し、この解体・粉砕を目指す闘いを構築することである。

③「早大の日常」を構成し、受容してきた「学生の存在的日常」に歯牙をかけ、ここでの学生存在の政治的―社会的位相のもつ歴史的、現実的な意味を、運動主体、闘争主体として刻印し、思想と行動における自立的、内発的な結合を〈理念〉、〈範型〉として創出してゆくことである。

周知のごとく、早大闘争は、この三つの軸心を常に絡ませながら展開されてきた。つまり、運動自体、実践自体が、かかる課題の構造的な結合、絡みとしてあるという点である。それ故に、早大闘争にとっては、運動が有する〈理念・形態・主体〉の構造的な位相を軸として、運動原理、結合原理が不断の論争課題であり、また逆にそのことの実践化―内在的論理性が主体の持続の根拠、運動の大衆化、力の根拠であるといえるのである。

確かに、昨年11月以降の諸展開は、断続的な高揚と極めて長い低迷、後退期を惹起したように見える。が、しかしここで注目すべきなのは、①、個々の事象、事態が発展段階的な序列化された意味を運動の展開内容として無効化している点。②、ある一定の低迷、後退期が、ここでの主体の内在的な転換をはかりながら、次への運動への行動方針―実践への時期としてあること。③、行動方針―実践において、突端的な武装から、クラス討論、行動に実体的な相互性が見られないこと。④、主体結合のもつ位相が、行動者集団、自治会、サークル、クラス、学年会等々の多様な関係の中で規律や規範行動綱領を持続的に生んでいること、等々である。

これら大衆運動の内部構成における固有性や多様性が「存在」としての力に転化する契機自体が、極めて抽象度の高い、質的な普遍性、全体性、包括性を保有しているという情況は、我々に何を教えているのであろうか。

その第一は、早大闘争を日本学生運動が歴史的に経験し、累積させてきた構造性の歴史的な実践化―駆動への契機をはらんだものとして、逆に個々の事象、事態、運動―行動のもつ有意味性を構造的に把握することを要求していること。ここでは、空間的な包括性、全体性（例えば、全学、全国等々や、発展段階的把握（実は、極めて単純時間把握であり、経験主義の裏返しであるのだが）は何の根拠も持つことができない。

第二に、この様な構造性は、不可避に、〈理念〉性、〈主体〉性〈型態〉を、〈理念・主体・型態〉の構造性として運動―行為を包括し、全体化する（時間・空間の絡み）ことを意味しており、闘いのもつ〈理念〉、〈範型〉は、それ故に歴史的現実の抽象と過程の絡みの裡から内在的必然として主体原理、集体原理、運動原理の創出を不可避としているということである。

成程、早大闘争は、従来の学生運動の特質から鑑みるとき、改良的な具体的契機を媒介にするか、あるいは、政治過程的な契機による普遍性の持込みという状況とは幾分異なって展開されてきていると指適されている。

しかし、にもかかわらず運動のもつ求心的ラジカリズムの根源性は、その深度を増しており、その力の遠心作用が、従来の経済的把握や、政治的把握、また超歴史的な主体把握による量への転化、広さの獲得という〈定型〉を超えて存在しているという点は何に因るのであろうか。

我々は、かかる事態を次の様に把握する必要があると考える。

それは、まず、「川口君虐殺」という契機自体を顕在化せしめた否定的現実が、ある意味で「普遍性」という仮構性を歴史的現実として存在せしめていたということにある。「川口君虐殺」が革マル組織員の未熟さからくるものではなく、革マル派の〈プロレタリア政治と組織〉構造の宗教的、超歴史的な仮構的普遍性として、また「ヌエ的な〈ドレイの体系〉や、「早大管理支配体制」という「早大の日常」を覆っている仮構的普遍性や、学生存在という歴史的現実が政治・社会構造の裡に有する固有の仮構的社会性、政治性のもつ擬似的な普遍性が、そもそも早大闘争が主体的に対象とせんとするアルパでありオメガであることによっている。

否定的な現実が仮構的な「普遍性」として顕在化している。そして、それが早大闘争を根底から規定するものであるという把握は、経済主義者や、実態主義者から見ればとらえることの出来ない現実であるといえる。何故ならば、大衆運動における固有の力が歴史的現実の中で突きあたってきた壁というか、「壁の壁」としての困難性は常に、この様な、政治―社会構造のもつ仮構的「普遍」、「国家―民衆」関係における擬似的な普遍構造の内在的な論理によってボカされ、弾力性の喪失したゴムまりの様に、何の手応もなく、かかる不可視な内在的論理に吸合されてしまっていたからである。

戦後の学生運動から全共闘運動に至る諸過程の裡に、我々がここでの運動における〈理念・形態・主体〉構造の内在的論理性を俯瞰する時、ここでの「国家―社会」に向けられた闘いの現実過程が、前述した仮構的な「普遍性」への屈折としてあることに自覚的でなければならない。

そして、同時に、日本の学生運動が、その深刻な後退局面を突破し、「国家―社会」への激闘を通して、その自立的、内発的な力を歴史的現実のものとして掌中する不可避な回路を想定するとき、早大闘争のもつ運動的構造性と、そこでの〈理念〉、〈範型〉創出にむけた悪戦は、その闘いのもつ過渡性をも包括して、我々が必然的な戦闘の回路として思想的、実践的に引き受けなければならないといえるのである。

我々は、早大闘争の持続性、持久構造、その抵抗運動のもつ歴史的な現実を必然的なもの、不可避なものと考える。そして、ここで苦闘を展開している対象としての日本的政治―社会構造、「国家―民衆」関係に歯牙をかける我々の任務と、日本学生運動の転質とその指示向線を明示せねばならないと考える。

## 日本学生運動に於ける蹉跌と回帰

何度も我々が指摘してきたように戦後の学生運動は、日本社会に於ける絶望的なまでもの孤立感をその内在性として有していた。より厳密に述べるとすれば、この「孤立感」の構造のもつ意味は、「政治主体」としての学生存在がもつラジカリズムと、生活的・社会的主体としての部分性、相対性―総じて過渡性のもつ複合性、破行性、つまり戦後的政治情況と日本的社会の特質に依っていたといえる。

周知の如く、この様な学生運動の戦後的な特質は、様々な曲節を経ながらも戦後過程を驀進し成熟を遂げてきた日本に於ける民族国家、市民社会の展開過程に規定づけられていた、と同時に、日本の敗戦革命の敗北から戦後日本階級闘争を意味づけてきた〈革命理論〉―〈権力闘争〉論の破行性としてあったことはこの間、何度か触れてきた。

戦後の学生運動が有した政治的ラジカリズムと、社会的孤立の情況は、戦後過程に於ける「国家―社会」の爛熟過程と、そこでの政治的―社会的諸再編の有する現実性の側から不断に解体を余儀なくされていった。

周知のごとく、かかる象徴的な闘いの契機として60年安保闘争とそこでの全学連の逆接的な「死」そして、70年安保闘争と全共闘運動の「自死」が存在している。

「大学」が支配層にとっては資本の有機的構成、高度化に見合った階級再編―統合、労働力の構造的創出として機能しているにすぎないにもかかわらず、日本民衆にとっては〈家族〉関係の貧さ―世代間伝承、教育―性・労働等―を救抜する選別された「共同性」としてのみ存在しえたことに依っている、という我々の指摘は、それ故に、戦後の学生運動が、不可避的に、その階層的な限定性を、社会―経済過程にのみ還元し、そこでの抽象性として把握される主体と

（一面よりつづく）

### 本号の内容


1章　はじめに
2章　早大闘争の根源性とその歴史的位相
3章　日本学生運動に於ける蹉跌と回帰


### 次号の内容


3章　つづき
4章　戦後学生運動と政治―社会構造の転質
5章　早大闘争と学生運動の新たな転換点
6章　新たな学生運動における我々の任務と方向性


# 裁判闘争の深化とわれわれの課題

―赤燈社―

現在、我々は諸裁判闘争の現水準の確定と内容深化が問われており、その為の作業が進められている。

我々の政治的思想的内容―路線を現実のものとして展開してきた自らの道程に、我々は何を把み、何処まで歩を進めることができたのか、という我々の政治力―社会力の時代水準を押し測る意味も含め、この作業は現実の裁判闘争に合せて進められている。そして、何よりも、現下の階級攻防において革命主体の存在そのものが問われ、我々の生や命と引き替える思想力―観念力が要求されているとき、我々は支配階級―支配層による支配秩序や共同性（擬制的）の構造を、政治―社会（経済）―軍事の領域からの水準確定が要請されているのだ。そのひとつの指標として、現在、法制審で進められている「刑法改悪」の問題が存在している。支配階級―支配層は、今や、その実質的な適用を既に現行裁判―制度の中で行なっており既成事実を積重ねていることは明瞭である。そして、最高裁では秘密裡で「刑訴法」の改悪をもくろんでもいるのであり、事案の事務処理化や徹底した訴訟指揮の背後にはこの様な司法の近代化―再編が進行しているのである。従って我々は、地道であれ、且つ、強いられたたたかいであっても、現実課題が己れにとって切実であると同じに、他者や世界にとっても切実なものとして押し出す意味で諸裁判を引受け、現下の支配階級―支配層の政治的意図と階級的野望を粉砕するたたかいとしなければならない。

主要に上げるならば、前号に記載された11・19沖縄闘争裁判の現段階に対する提起の内容と合せ、現在、10・17立川闘争（自衛隊進駐阻止闘争）が控訴審の段階に突入しており、砂川―立川闘争の歴史的、政治的、社会的背景を一切問わず、「事実」を歪曲した犯罪化に対して、徹底した思想的弁護を展開すべく体制を整えている。（第一審、判決二年六カ月）既に第一回公判が12月13日に予定されている。また、諸学園闘争裁判は71年6・17都立商短バリスト闘争、71年秋期法政大学費闘争、72年秋期青学大学費闘争が進行しており、何れも、たたかいの契機や回路が異なってはいるが、それぞれが抱えている課題は、戦後日本社会での学生存在―学生運動の蓄積からの総括が要求され、同時に、現実へのたたかいへとそれが転化されなければならないものとしてもあるのだ。そして、73年6・14早大闘争による不当逮捕―起訴―公訴提起以後、我々は、10月1日東京地裁刑事一部での併合審を獲ち取り、この間の我々の否定的状況や全審積力を賭けて勢力的な公判準備（イメージ、内容深化を意見陳述へ凝縮せよ！）を進めており早大闘争の11月攻勢に照準を合せ、たたかいの圧倒的高揚を迎える中で我々の裁判闘争も展開されなければならない。第一回公判は12月6日に決定された。

政治闘争裁判といわれるものはそれ自体独自的なものとして扱ってはならない。つまり、裁判闘争の為の「闘争」などあり得ないということである。重要なことは、そのたたかいに如何なる形態や契機や表現を取って参加しても、本質的には我々の政治的幻想的共同性を背景にしてたたかわれたのであり、そこでの歴史、時代水準は我々の現存性―日常的生の営みの中に累積しており、プラスもマイナスも含んでいるのである。そして、そこには測り知ることができない負荷や矛盾が存在することも必然である。だが、それを個体性の側の心的世界の分析に転化することも、また、共同性―集団の内に転化しても、そこでの格闘を放棄した地点での裁判闘争は必然的に法―国家の呪縛力へと敗退させられるか、己れの実存とは無縁の「過去形」でしか現実の姿を視透することができなくなる。我々は、領域や位相が異なっていてもそこでの日常関係として引摺らさるを得ない裁判に関して、諸実践（政治・組織・生活）の中から国家―政治―権力像を創成することにより、裁判闘争の持続性と相対

# 法大学費闘争裁判勝利のために

―学費闘争の過程と若干の問題点―

（東拘在監）高橋克行

# 情況の壁の破砕と早大―投機闘争へ